2-6 テン

【分布】

ニホンテン（以下、テン）は2亜種に分けられ、ホンドテンが本州、四国、九州、淡路島に、ツシマテンが対馬に自然分布する。また、北海道、佐渡に導入されたものが生息する[1,2,3]。

【生息環境、形態的特性、基本生態】

テンはジェネラリストな雑食性で果実類、昆虫類、小型脊椎動物が主要な食物である[4,5,6]。そして、季節の餌の利用可能量に応じて食性を柔軟に変化させる。

テンは森林の利用頻度が高いが、中でも境界林や林縁部への依存度が高い。そのため、中山間地域も生息地として利用されている[7,8]。

オスの方がメスよりも体重が重い。ツシマテンではオスが1.5kg前後で、メスは1kg前後であった[9]。頭胴長は40cm前後で、尾長は20cm前後である。夏は顔が黒く、体は茶褐色（写真2-6-1）。冬毛は顔が白くなり、体は明るい黄色になる（写真2-6-2）。

テンは登攀能力に優れており、樹上空間を利用することができる[1,3]。太い木を垂直に登ったり（動画1）、細い枝を渡ったり（写真2-6-3、動画2）、木から木にジャンプしたりすることできる。そのため、繁殖用の巣穴や休息場所として、樹上の樹洞などを利用するが、中山間地域では家屋の屋根裏や物置を利用することがある[10,11]（写真2-6-4）。

写真2-6-1　夏毛のテン

写真2-6-2　冬毛のテン

写真2-6-3　樹上のテン

写真2-6-4　物置を利用するテン

【被害の概要、特徴】

ぶどう、かき、イチゴなどの食害や鶏舎への侵入によるニワトリや卵の被害が報告されている[12]が、全国的な被害統計には種ごとの集計値が示されていない。かきサイズのものは持ち去って別の場所で食べることが多いが（写真2-6-5）、野外試験の結果ではぶどうは袋を破いてその場で皮ごと食べることが多かった（写真2-6-6）。その場合、皮がほとんど残らなかった。

写真2-6-5　かきを持ち去るテン

写真2-6-6　ぶどう食痕（試験用にぶらさげたもの）

【被害対策の基本】

放任果樹などの餌場や空き家などの潜み場を減らす対策は他の獣種と同様に必要であり、テンによる家屋や施設への侵入被害を防ぐためには、家屋や施設の侵入経路を特定して、その隙間を防ぐ必要がある。飼育している小型のオスのテン（体重約1kg）は5cm角のワイヤーメッシュを通り抜けることができたので、家屋、鶏小屋、柵などの隙間を塞ぐ時には隙間は5cmよりも小さくした方がよい[13]。

テンは登攀能力の高い動物なので、物理柵は上部から登って侵入されてしまう。そのため柵に屋根がない限りは電気柵を使うことが必須である。テンは体重が軽いのでビニールハウスの周囲など、比較的平らな場所では通電性のある抑草シートと組み合わせて通常の電気柵を使うことができる（写真2-6-7）。この場合、電気柵の高さは最下段を5cmとして5cmきざみで3段以上にした方が良い。

テンは登ることが非常に得意なので、ネットも噛み破るよりもまず先に登って侵入しようとする。したがって、登った先で感電させる「白落くん[14]」は、テンにも効果がある。ただし、登る際に上部で止まらないこともあるので、電気柵と防風ネットとの間をすり抜けられないように内側に防鳥ネットなどを使ってすり抜け防止を行った事例もある（写真2-6-8）。

野生個体は1mm以下のワイヤーを渡ることができたので、電柱の支線やぶどう棚を支えるワイヤーを渡れてしまう。これ以上の径の線がある場合には侵入経路となってしまう可能性が高いので、渡れないようにする必要がある。

野生個体は2mまで幅跳びをすることが可能なので、家屋の周り2mの範囲に利用できる樹木や物置をなくしたり、樹木や物置から2m以上離して侵入防止柵を設置したりする必要がある。

写真2-6-7　電気柵（堂山氏提供）

写真2-6-8　「白落くん+防鳥ネット」

動画1_放任かきの木登り　動画2_放任かきの枝渡り